安原米四郎先生の思い出

モ　ラ　ル　会

目　次

安原米四郎先生の略歴. 1

告別式における弔辞. 2

銀行関係者の「思い出」. 4

モラル会会員の「思い出」. 12

安原先生著『銀行』はしがき. 27

安原先生著『米欧かけあるき』. 29

安原　米四郎先生の略歴

・明治３６年　７月　３日　　広島県　福山市　生る

〔　実誕生日　　同年　５月３日　〕

・大正１５年　東京帝国大学　法学部政治学科　卒業

〔　福山中学・第一高等学校　卒業　〕

・大正１５年　４月２５日　　糸様と結婚

・昭和２０年１１月　　東京銀行協会　入社

大正１５年５月	共同印刷
大正１５年１０月	住友海上
昭和　３年９月	中外商業（日本経済）新聞社
昭和１４年１０月	東洋拓殖

・昭和４２年　７月　　東京銀行協会　退社

・昭和４２年　４月
　～４４年　３月　　｝学習院女子短期大学　講師

・昭和４３年　４月
　～４６年　３月　　｝横浜商科大学　教授

・平成　２年１１月２６日　　ご永眠

故安原米四郎先生告別式における葬儀委員長安原和雄足利工業大学教授弔辞
平成２年（１９９０）１１月２９日（木）１３００時　於　阿佐ケ谷世尊院

＊序（果たせなくなった米寿のお祝い）

安原米四郎先生、一日も早い快復を、というご家族の方々をはじめ多くの人たちの切なる願いも空しく、とうとう逝ってしまわれました。計画していました米寿のお祝いも果たせないまま、もはや二度と元気なお姿に接することのできない今となっては、ただただ無念というほかありません。

ついこの間まで毎日の散歩を欠かされることなく、なじみの深いその散歩道に面した世尊院においてただいま先生にお別れを告げる集いを催しております。若輩の身でありながら弔辞を申し述べることをお許しください。

＊先生の業績（銀行の社会的責任に関する先見）

全国銀行協会連合会事務局長という要職にあって金融界をはじめわが国経済界および官界において広くかつ深い交友関係を築かれるとともに金融界の発展に大きな足跡を残されました。

とくに注目すべきことは昭和３１年という時点で「銀行の姿勢を正さなくてはならない」という銀行のいわゆる社会的責任論の立場から、のちに日本銀行総裁、経済同友会代表幹事に就任した佐々木直、現在、第一勧業銀行名誉会長の井上薫、大蔵事務次官、東京証券取引所理事長を歴任した谷村裕の各氏らに呼びかけ、具体的な行動を起こされたことであります。

昭和４０年代に入ると企業の社会的責任のあり方がにわかに論議の的となってきたことは周知のことですが、その１０年も前にはまだ経済界にとって関心を引くテーマではありませんでした。そういう状況下で先生があえて問題提起をされたその先見性にはまことに驚くべきものがあったと敬服するほかございません。

＊モラル会の指導（安原学校の校長先生）

銀行協会在職のときから誰いうともなく先生を校長先生とお呼びするようになりました。いうまでもなく先生のおだやかな人柄そして優れた識見からよってきたものであります。ここでぜひ触れておかなければならないのは、それが単なるニックネームにとどまらず、現実に安原学校の校長先生として多くの門下生の指導にご尽力されたことであります。その一つに私もその一員として名を連ねているモラル会というのがあります。いまから２０年ほど前にあまりにもモラルを軽視する風潮に胸を痛めておられた先生の提唱によってつくられ、今日に及んでおります。

＊先生のお志（抑制のきいた情熱）

と申しましても先生は決して道学者ぶったモラリストとして終始されたわけではありません。若いころのエピソードを一つ披露させていただきます。

奥さまと結婚されたのは、東京大学法学部を卒業された直後で、奥さまはまだ目白の日本女子大学の学生だった大正時代の終わりのころです。当時のことですから男子禁制だった女子学生寮へ結婚前に何度もデートに出掛けられたとうかがっております。この若々しい情熱はその後の生涯を通じて実直一筋ともいえる静かな風格の内にいつまでも秘めておられたように思います。お二人の結婚生活は５０年目の金婚式をはるかに通り越して６５年に至るという例の少ない記録を達成されました。わたしども後輩からみまして、おうらやましい、の一語に尽きるおしどり人生であったと申し上げたいと存じます。

とかく利に走り、人間社会のあるべき道を踏み外すことの多い昨今の世相の中で先生のお志を無にすることなく大切に継承していくことはもちろんですが、同時に先生の抑制のきいた情熱にもできることならあやかりたいと念じております。

＊先生の生涯（充実した人生）

先生の生涯は一本調子のそれではなく、彩りの豊かな人生でもあったのではないでしょうか。仕事を通してみた先生の人生航路がそれをよく物語っています。大学卒業後の振り出しは印刷会社の職工の仕事をあえて選ぶという、法学部出身者としては珍しい実社会への門出となりました。その後、保険会社、新聞社さらに石炭会社などと幅広い経験を積まれ、最後が銀行協会でした。

いまでこそ職業を変えることにちゅうちょしない、いわゆる転職の時代とうたわれていますが、昔はなかなか勇気の要る決断であり行動ではなかったかと拝察いたします。しかもそれは限りなく充実した人生を、という先生の理想と信念とそして強い意志とに根ざしたものであったことを肝に銘じ、忘れてはならないと思います。今日風にいえば、「翔んでる女性」ならぬ「翔んでる男性」の魁であったと形容しては失礼になるでしょうか。

＊結び（「つねに何か勉強しなさい」）

ぼくが先生に初めてお目にかかったのは３０年以上も前のまだ学生のときでした。郷里広島県も名前安原も同じというご縁で大変親しくご教示いただきました。先生が口ぐせのようにおっしゃっていた「つねに何か勉強しなさい」という言葉がいまなお耳に聞こえております。それにしても学ぶべきことのみ依然としてあまりにも多く、自らの未熟と非力をただ恥じるばかりであります。

どうか天国からわたしどもを折りにふれ、叱って下さい。

ご冥福を心よりひたすらお祈り申し上げます。

１９９０年１１月２９日

葬儀委員長
モラル会会長
足利工業大学教授　　安原　和雄

まとめ役　安原さん

第一勧業銀行
名誉会長　井上　薫

安原さんとのおつきあいは、お互い隣り部屋で仕事をしていて、何となく顔見知りになるところから始まった。

昭和２０年、戦後間もない頃の事である。
当時、私は、帝国銀行本店（現在、第一勧銀東京中央支店のある所）４階にあった審査部で働いていたが、その部屋の隣りに発足したばかりの銀行協会調査部が「間借り」していて、安原さんはそこの調査課長さんであった。

どこもここも焼け跡でオフィス難の時代。また、安原さんは万代順四郎さん（当時の帝国銀行頭取、全銀協会長）とのお知り合いが縁で協会に籍を置かれたばかりの頃のことである。

そして何となく顔見知りの間柄になって、その後おつきあいは急速に深まっていった。

当時の時代の風潮で、戦争によって混乱した日本経済をどう立て直すべきかが若い人々の間で盛んに議論されていた。
金融界としてその埒外ではなく、金融界の再建は我々の手でと意気ごんで議論しあった私たち若い仲間の、いわばまとめ役ともいうべき位置を、次第に安原さんが占められるようになったからである。

その後、昭和３０年頃にスタートした、銀行経営のあり方等について自由に話し合う場であった七日会でも、安原さんには大いにお世話になった。
大蔵省の石野信一さん、日銀の佐々木直さん、松本重雄さん、前川春雄さん、三井の田中久兵衛さん、三菱の中島正樹さん、住友の伊部恭之助さんなどがそのメンバーで、安原さんは、まとめ役であった。

そして、まとめ役としての安原さんはと言えば、私が初めてお会いした頃から既にこれ以上の人はないと言えるぐらい最適の人であった。　非常に誠実なお人柄、控え目ではあるが率直なご発言……

後年、全銀協の事務局長として、むずかしい仕事を見事にやり遂げられた安原さんの資質は、お若い頃から輝いていたのである。

――― やや余談めくが、昼食会、旅行の会、ゴルフ会と様々な形で行われた七日会で、ゴルフをされない安原さんがゴルフ会にまで参加され、歩いてコースを回られたことを今でも記憶している。

それはいかにも安原さんらしい、また、安原さんならではの姿であった。

『恩人　安原さんを偲ぶ』

北　原　　道　貫
全　銀　協　顧問

昭和２３年、銀行協会に戻る時、最初にお会いした方が、安原さんだった。「相手の話によく耳を傾け、理非を明らかにするが、親しみを覚える方」という印象を受けた。先方は私のことを「相当ねばる男」と思ったと、後日笑っておられた。

この出会い以来、安原さんには、公私にわたり親しく薫陶を受けた。

昭和４１年のある日、安原さんから「君に総務部長をやってもらおうと思っている。」といわれ、言葉に詰まった。

当時、協会調査部長の傍ら、専修大学教授の職にもあって、いずれ大学に専念する気持に傾いていたからだった。

それを正直に申し上げたら、いきなり手厳しいお叱りを被った。

「君が熱心に誘って採用した若い人たちに、協会は働きがいのあるところだといってきたではないか。それを見捨てて出ていく積りか。」

電撃に打たれたようだった。甘えをキッパリ清算し、大学をやめて協会の仕事に専念することになった。

安原さんは私の一生に大きな影響を残した恩人である。

『安原さんを偲ぶ』

柴　崎　純　之　介
（財）家計経済研究所
理事・事務局長

私が北京時代に勤務していた、中国連合準備銀行調査部長の桑野　仁氏に連れられて、安原宅へ伺ったのは、昭和２２年の春頃だったと思う。

桑野さんは、元調査部員の就職口を探してくれていた。

私は、結局、友人のいた大阪田辺製薬へ入り、東京支店に回され、そこで、後の安原智恵さんと机をならべる。田辺は４年で辞し、経済発展協会へ努めるが、安原先輩のご指導を受けるのは、２７年からである。

そのころのある休日、何かの連絡で安原宅を訪ねた。そのとき、安原さんに「約束の時間に遅れないこと、先輩の話を聞くときはちぁんとすわること」といわれ、正座した記憶がある。

以来、安原学校の生徒となる。

３６年に縁あって、銀行協会に入った。その後、宏さん、智恵さんの縁結びや、宏さんを田辺製薬へ紹介した。

「君とは、これで貸し借り無しになったね。」といわれた。

厳しいが暖かい人でした。どんな場合でも、真実の生き方を教えられた。

自らに忠実で筋を通した方だったと思う。

また、どこかでお目にかかりたいと思う。

『安原さんの思い出』

岡　田　孝

東京金融先物取引所

常　務　理　事

銀行協会の若手職員が安原さんに奉った尊称は「校長先生」であった。

二つの思い出が込められていたかと思う。

一つは安原さんから受ける優しさの中にある折り目正しい印象、もう一つは若者を信頼し、能力を啓発して行こうとされる真摯な姿勢を表現したものであろう。

昭和２７年晩秋、卒業後は銀行協会で働くことを決意した私に、当時、調査部長であった安原さんから「大学の講義よりも勉強になると思うから調査部の仕事の手伝いにきませんか」とのお誘いがあり、学生服姿での勤務が始まった。

以来、約４０年、安原学校での不肖の弟子であり続けた。

日常業務では手をとり足をとりのご指導を受けたが、それ以外にも、昼休みの皇居周辺の散歩のお伴をよくした。

人生のこと、社会のことなど話題は多岐にわたったが、有難く、かつ、いささか耳が痛かったのは、「今はどんな勉強をしていますか、最近読んだ本で面白かったのは・・・」とのご質問だった。効果を計算されてのご

下問だったとは思わないが、お陰で性怠惰な私にも生涯学習の習慣が何とか身についたように思う。

安原さんの真似がとてもできないなと痛感するのは、未来に対する強い確信、置かれた立場での変革への努力、若者に対する信頼と教育の実践である。大正デモクラシーの中で教育を受けられ、その後の暗い谷間の時代を経験され、一時期は労働者の中での生活も考えられたという安原さんには、私どもと異なる強固なバックボーンが１本通っておられた気がする。

時代は安原さんの描かれた未来の方向には必ずしも直線的には動いていないと思われる。安原さんのご遺志に沿えるよう少しでも努力を続けて行きたいと思う。

『安原さんの思い出』

吉　田　　暁

武蔵大学　教授

私は安原業務部長の下で社会人生活の第一歩を始めた。

当時安原さんは、５０をちょっと越えたばかり、今の私よりお若かったが、あの老成の域にはこれからも到達できそうにない。

何かというと「勉強していますか」といわれるのがきつかった。「読むことも必要だか、書かなければ駄目ですよ」とも常にいわれた。

確かにその通りだと今では思うが、こちらは青春を謳歌するのに忙しいし、こつこつと書き溜めていくような明白な目的意識が自らの内にあるわけでもない。結局はご下命による下請け原稿という形で教育してくださった。

今でも覚えているのは、当時法規専門委員会の大問題であった包括根抵当問題について —— といっても法律問題そのものではなく問題の経緯についてであったが、安原部長名での金融法務事情への寄稿であった。何とか書き上げて提出すると、勧銀の堀内　仁さんにみて貰ってこいといわれる。おそるおそる伺うと丁重に扱ってくださって、一、二筆を入れてパスさせてくださった。大家のお墨付きは若者にとって大きな励みである。

安原さんは人脈づくりの達人だったと思うが、そのご自分の人脈に若者を接触させることを通じて鍛えてくださったのである。お応えできたかどうかは全く別のことであるが。

『いつも背筋を伸ばして』

皆藤　　実

全銀協　調査部長

社会に出て初めての２年間、直属の部長（事務局長を兼務）として、その声該に接することができたのは、考えてみれば私の人生にとって幸せでありました。もっと公私にわたって親しくご指導願っておればとの思いも致します。

安原さんの印象はといわれれば、歩いていても、座っていても、いつも背筋をぴんと伸ばして、歩く時はゆっくりと、そして時々靴が鳴っていたような気がいたします。

いつも穏やかな表情で声を荒げることなく、それでいて仕事については筋を通す姿勢が周りからもはっきり感ぜられました。そして、何かの折、破顔一笑した時の幼児のような表情もつい昨日のような気がします。

ともかく、明治生まれの人間の気骨といいましょうか、肝のすわり方とでもいいましょうか、とても現在の自分と同じ年頃であったとは考えられません。

今後とも私にとっては、物ごとや人間関係に悩みがでたとき、心の支えの一人でありつづけるような気がします。

ところで、昨年春、太陽神戸銀行の塩谷元頭取から「安原さんお元気ですか」と尋ねられました。都市銀行研修会に金融界の先輩としてご講演頂いた大磯プリンスホテルのティールームにおいてです。

そこからは、昭和３６年冬の第２回研修会の際、安原さんと講師の朝日新聞の森　恭三氏が記念写真をとった大きな松の古木が眼前に眺められました。

昭和３０年代、塩谷元頭取が銀行局の課長時代、安原さんが組織した銀行の論客（常務クラス）との会合は今思い出しても楽しかったとのことです。そして、塩谷さんは井上　薫（第一勧業銀行元会長）、伊部恭之助（住友銀行元頭取）、佐々木邦彦（富士銀行元頭取）など、そのグループの主要メンバーを当時、金融制度調査会がオーバー・ローン問題を検討するために設けた常設調査企画部会（東大の館先生も初めて審議会のメンバーとなった会合）のメンバーとして推薦したという、私にとっては日本金融史秘話とでもいうべきお話を伺いました。

それにつけても、安原さんの団体業としての先見性と組織力を垣間見たような気が致しました。

思い出は尽きませんが・・・・。

『安原先生と銀行倶楽部』

青　山　　伶

東京都　生活文化局

安原先生の書かれた『銀行』（岩波新書）は、銀行とは何をするところか、銀行はどうやって儲けているか、といった誠にわかりやすい構成でできている。この本を読むと素人にも銀行の仕組みが楽に理解できるようになっている。

この本の語り口はふだんの安原先生の語り口と同じで、政治・経済・社会の複雑な仕組みや動きも先生の手にかかると途端に明快なものとなる。

私にとっての安原先生は銀行倶楽部で開かれていたモラル会の思い出と切り離せない。

横河工務所（松井貫太郎）設計の赤煉瓦の銀行倶楽部は、壁、床に鉄筋を入れた、豪華で堅固な建物であった。

今、一人瞑目すると、先生が銀行倶楽部で語った一言一言が昨日のことのように鮮明に蘇り、しかもそれが自分の血肉となっていることを実感するのである。

『安原先生と銀行倶楽部』

石井　　彰

ＮＨＫ考査室

大内山の堀端の柳並木が芽吹く１０年前の春。丸の内の一角、重厚な煉瓦造りの銀行倶楽部表玄関の赤じゅうたんの階段を登りました。

広い天井の２階食堂で、初めて接する先生の穏やかな笑顔に迎えられました。

先生へのご挨拶はモラル会入会と、その前提条件（？）だった講師役お引受けの言上が目的でした。

ナイフ、フォークの用意された昼食時、先生の発言は入社試験の口答試問のようにも記憶しています。

「ＮＨＫではどんな仕事をしてきましたか」「最近読んだ本は何ですか・・・」決して大声でなく、饒舌でなく、それでいて鋭さと厳しさが印象的でした。

絶えない温厚な表情、伸びた背筋の端正な姿勢、終始正眼の律儀な眼差しから、モラル会の歴史と実績が読み取れました。

銀行倶楽部には記者室もあり、経済記者には名物のステンドグラスやカウンターバーなどと思い出一杯です。

先生と最初の触れ合いだったあの銀行倶楽部も、今は瞼の中に残るだけです。

『寡黙の人』

笹　木　和　広

田　辺　製　薬

私が先生にお会いしたのは昭和５３年夏、銀行協会の食堂だった。

当時私はスモン問題の仕事を私意で去り、虚脱感に包まれた日々を送っていた。同じ社員で先生の長男に当たる宏氏の紹介でのモラル会入会時が出合いであった。

小声で簡単な挨拶を頂いたが、優しい笑顔がそこにはあった。

懸念した病状が増悪し、会を欠席する日数が年とともに多くなっていった。

ある日、開会前の昼食を宏氏と摂っていた。その時つかつかと先生がテーブルに近づき、「健康は一番大切なものです。規則正しい日常生活を送ることは大事なことですヨ。」とだけ話されて静かに去って行かれた。

過日、先生の訃報に接した時、あの言葉が一瞬脳裏をかすめ去った。

先生との会話は今思うとこの時だけ、誠に寡黙の人であった。

後半生で娘婿と長男を相次いで夭折する不運に見舞われた先生を思うに付け、他人の私に頂いた僅か数行の言葉の重みを今改めて有難く受け止めている。

『安原米四郎先生の思い出』

杉本　幹男

陸上自衛隊　小平

昭和５２年、会に入れて頂いて以来、温かいが厳しそうだという先生の印象を印象以上のものにするような踏込みの自信がなく、まことに残念ながら、個人的にご教示頂く機会はありませんでした。

ただ、昭和５７年に亡くなった先生の娘婿、佐藤　柾氏からは、日本の安全保障について当時最も権威のあった２冊の大部の書籍と囲碁の本を頂戴したことがあり、自らの選択した道については、確かな知識でしっかりと考えなさいという先生のお声に佐藤氏を通じて接していたのだと、今では感じております。

先生を几帳面な方、佐藤氏はちょっとラフな方というふうに当時は感じていましたが、今ではお二人のこまやかな思いやりのお心と律儀さ、そして何よりも精神における寛ぎを強く思いおこします。

先生のお顔つきや起居振舞からだけですら多くを教えられました。貪欲にあれこれ伺うべきであったと後悔しております。

『米四郎大先生と宏先生』

丹　　正　昭

田　辺　製　薬

米四郎先生との出合いは、ご子息で、私の公私共に恩師と仰いでいます宏先生のご紹介で、モラル会に入会した５年前の春でした。

宏先生の「動」に対して、米四郎先生の「静」が、調和のとれた会合にし、我々モラル会の会員一人一人が、充実した気持ちと明日への挑戦を感じさせるものでありました。

米四郎先生が持つ「静の中の激しい情熱」が、現在のモラル会の真理の柱となっていることを肝に銘じ、また私の恩師である宏先生の「心温まる激動」に応える為にも、お役に立てるよう自己研鑽に努めたいと思います。

２０世紀で大活躍なされた両先生の遺志を２１世紀を担う若き世代に語り継げられるように、モラル会の発展を祈念します。

最後に両先生の御奥様方ならびにご家族皆々様のご健康とご多幸を心よりお祈り申しあげます。

『モラル会；その講師陣の豪華さ』

平　井　洋　三

日本在外企業協会

私がモラル会に参加させて頂いて、早や１０年になります。モラル会は若い人の勉強会と聞いておりましたので、私がこれまでにいくつか参加してきた同窓会や職場のサークルほどのものを想像しておりました。

ところが、出席してみて驚いたのは毎回お話を伺う講師陣の豪華さでした。

しかし、それもやがて安原米四郎先生が主宰されている会合であるからこそ、かくも当代一流の方々が快くお話くださることがわかりました。

戦後日本の経済復興のため金融制度のあり方について、若き日の先生方は官民一体となって研究される中でお互いの友情を育まれ、そのお仲間が我々ひいては後世のためにその貴重な体験と知恵を伝えてくださっていることを知りました。

そして、すでに壮年期の後半に懸からんとする我々は、先生から学んだものの幾分かでもを後輩に伝えて行くべき義務があると考えております。

安原先生、永い間のご指導・ご教示をありがとうございました。

『美しく老いる』

前　田　明　則

前田毛皮　社長

「美しく老いる」　そんな一言を耳にした。

「二度わらし」　そんな言葉が目を射った。

誠実の人　温厚の人　安原先生のすごい人脈に不思議な秘められたエネルギーが輝いている。

ある詩人が「むごたらしさのないところに『美』は生まれない」と書いていた。

先生の声が聞こえる。

「じゃ　始めましようか」

「じゃ　時間がきたようだから　これで」

もう少し同席していて欲しいなあ。あと少し。

そんな時でも　「じゃ　これで」　そこにすさまじい人生を感じた。

あのにこやかな静かな笑みと穏やかな声が、今も目の前にわが耳に彷彿とする。

合　掌

『「静慮」と「如水」

松　原　義　泰

厚　　生　　省

国立衛生試験所

この春、或るご縁で中国三筆といわれる一人から「静慮」という書を戴いた。また、先日は元国立衛生試験所長の長谷村顕雄先生から一か月半の猶予の後、「如水」と書かれた色紙を頂戴して喜悦した。

私は戦前外地で生まれ、たまたま尋常でない生活体験があり、その時の経験がその後の生き方に少なからず影響を与えたので、晩年はどうしても「病気の無い平穏な暮らしがしたい」との願いがあったので殊更に嬉しかった。

今、安原米四郎先生の思い出に触れるにあたり、その事の思いがあったので冒頭に用いた次第である。

先生とはモラル会の時以外はお付き合いが無かったが、定例会の時は身近におられながらいつも高遠な一種近寄り難い存在に感じていた。それは畏怖と仰慕の入り混じった複雑な心理であったように思う。が、他面、安心と温もりと誉れと甘えも感じていた。

その不思議な経験は臨場感をもって今でも蘇ってくる。

それは生きている「静慮」と「如水」であったのかも知れない。

『安原米四郎先生とご家族』

三　室　孝　之

全　　銀　　協

先生との出会いならびにお人柄等につきましては、「私の履歴書」（昭和５０年５月刊行）で触れさせて頂きましたが、謹厳実直・寡黙にして、実行力があり、高遠な理念と温かさをもっておられ、殊の外、『モラル』に視点をおいて人物・物事を観ておられたように思います。

このように、高遠なお人柄の先生の、ご家庭における父親振りは如何であったのか、私も父親の一員として、かねてから大変関心を持っておりました。

先日、お彼岸時、先生のご自宅にご焼香にお伺いしました折りに奥様に先生の父親像をお聞きしましたが、家庭外と全く同様の家庭振りのようでした。

といいますのは、余り余計なことは話さず、また、わが子に対して一度として体罰を加えたことがなく、不言実行で大変頼りがいのある理想的な父親であったようです。

また、愚問でしたが、奥様に夫としての先生は如何でしたかお聞きしましたところ、「今度、再び生まれ変わってきても先生と結婚したい」とのお話がありました。

今改めて思いますのは、私の心に占めていた先生、宏さん、佐藤さんの比重は大きく、ぽっかりと穴が開いてしまったようで、虚無感に苛まれておりますが、しかし、『モラルと高遠な理念』を持って少しでも、先生、宏さん、佐藤さんの域に達することができますように、努力していきたいと思う今日この頃です。

なお、蛇足ですが、家内に先生の奥様が話された先生との結婚の話について、先生の奥様と同様な気持ちを持っているか聞いたところ、「それは今後如何で、ペンディング」とのことでした。

やはり、夫として、父親として、なお一層の努力が必要のようです。

最後に、先生、宏さん、佐藤さんのご冥福ならびに奥様はじめご家族の皆々様のご多幸とご健勝を心からお祈り申しあげます。

『仙人のような方でした』

村　田　道　子

温　泉　新聞社

銀行倶楽部で、講師の方の隣に背筋をピッと延ばして腰掛けていらっしゃる姿が思い出されます。５分前には必ず席につかれ、時間になると端然と「始めましょう」と．．．．．．

お若い時を存じあげない私には、現代の仙人のように感じられました。

『安原先生とアダム・スミス』

安　原　和　雄

足利工業大学　教授

安原先生の提唱でつくられた「モラル会」とは言い得て妙だと、モラルどこ吹く風の世相にあってつくづく思う昨今である。

私にとって時折、安原大先輩とアダム・スミスとが二重写しになって浮かび上がってくる。スミスはいうまでもなく１８世紀のイギリスの経済学者で、その大著『国富論』（岩波文庫版５分冊で約2,000 ページ）が名高い。そして、「自由放任」思想の元祖というわけで、それをいいことに浮利を求める手前勝手な競争を当然視する風潮が残念ながら企業社会に広がっている。

しかし、これほど大きな誤解はない。国富論の中で「自由放任」という表現が出てくるのはたったの１回で、しかもスミスはモラル、正義を大前提にして自由競争の意義を説いた。つまり、モラルを忘れた自由市場経済は正義に反するというのがスミスの主張であった。

安原先生のご遺志を引き継ぐためにもモラルと市場経済のあり方を問い直してみたい。

『「私の履歴書」と先生』

吉　崎　弘　巳

B.　M.　W.

私がモラル会で最初に先生にお会いしたのは１５年も前になります。

その当時は銀行協会で土曜日に開かれ、先生も出席されていました。

先生は講師の方の紹介を終えると、白く長い睫の瞼を閉じて講師の方の話を聞いておられました。

現役を既に離れておられた先生は、我々のために講師をお迎えした主人として同席されていたのであって、あるいは眼を閉じて休んでいらしたのかも知れません。

その様子は先生がお書きになった「私の履歴書」の印象そのものでした。先生の業績に比べ、「私の履歴書」はごくさりげなく、あたかも「何も大層なことは有りませんでしたよ」といっているようでした。

お通夜の日、受付にいた私は雨に、時折強くなる風に、そして足元の冷えに先生を知る全ての方の心の内を感じていました。

『安原先生の思い出』

渡　部　　修

商品情報センター

大学を出て早、四半世紀になるが、就職、結婚、転職、独立．．といった大きな節目の時にはいつも真先に先生にご相談、ご報告をさせて頂いてきた。さぞやご迷惑だったろうと思うのだが、嫌な顔ひとつせず親身になって話を聞いてくださった。そして、何か問題が生じれば即座に対応してくださったものである。

１０年程前のことになるが、私のライフワークともいうべき「五代友厚」研究の成果に目を通して頂いたことがある。４００字詰めの原稿用紙で約４００枚だからかなりの分量のはずだったのだが、数日後には感想を聞かせてくださり、さらに原稿を娘婿の佐藤さんに付託されたのである。

佐藤さんは大学の先生にも当たられた上で問題点を列挙してくださった。これをクリアする作業をしている最中に佐藤さんは他界され、出版企画は頓挫してしまった。

今度１０年遅れで、漸く出版にこぎつけることができたが、先生、宏さん、佐藤さんに読んで頂けないのが残念でならない。

『安原先生の思い出とモラル会』

並　木　和　夫

全　　銀　　協

私が銀行協会に入った年ですから、今から２２年も前の春のことでした。

銀行図書館で調べものをしていると、音も無くすーと通り過ぎていった一人の老人（？）がいらっしゃいました。それが安原米四郎先生でした。

協会の元事務局長と知ってからは恐れ多い気もしましたが、よくお会いし、自然と挨拶を交わすうちに、打ち解けてしまいました。

しかし、挨拶を交わすのは簡単でしたが、話題を見つけてお話をするとなると大変で、思ったことの十分の一もお話できず、冷汗のかき通しでした。

三室さんの紹介でモラル会に入ってからはなおのことでした。最年少会員で末席を占め、先生と先輩諸氏のお話に、緊張の連続でした。当時、とても質問等できる状況ではなかったのを記憶しています。

ある日、話題が協会の現状に及んだ時、組織改革について私見を述べようとしたら、「あなたは、今の組織内で何をしてきましたか？」といわれました。先生の目は、組織云々をいう前に自分なりの努力をしたのか、と尋ねておられました。

その時、不言実行の厳しさを学びました。

338.21
Y64

受贈

はしがき

私は學校を出て、社會生活に入ってから今日まで二十數年間、その大半を銀行關係の仕事で終始して來た。その間何回か、銀行に關係した研究をまとめてみたいと思ったことがあるが、生來の不勉強のため今日まで實行出來なかった。

昨年たまたま本書店から話があり、「銀行」という題目で、まだ學校を出たばかりの人か、學生の方々を對象とした分り易い本を書いてくれとのことであった。私は長い間銀行關係の仕事をしては來たが、殘念ながらまだ一度もほんとうに銀行の中に入って、自分で銀行の仕事をしたことはなく、いわば外から銀行を眺めて來ただけなのである。したがって銀行のことを知っているようで、まだ知らないことが多い。しかしこの注文のようにいわば素人の方に讀んで貰う本を書くには、かえって私のような第三者的な者が書いた方がよく分って頂けるのではないかと思って、あえてお引受けした次第である。

しかしいま書き終えて感ずることは、やはり自分の不勉強と無力のため、本書店の御希望に副い得るようなものが出來なかったということである。しかし私にとってはとにかく始めての試みであり、また今までに出ている多くの本とは多少違った書き方をしているところがあるのではないかと思っている。私はこれを足掛りとして今後さらによりよいものを書き上げて行きたい熱意にかられている。

讀者の皆さんも、この解説書を一つの踏み臺として、銀行に對する認識をより一層深めて頂くことが出來れば望外の幸である。

最後に本書を書く機會を與えて下さった方々に厚くお禮を申上げると共に、本書に對する忌憚のない御批判をお願いする次第である。

一九五四年八月三日

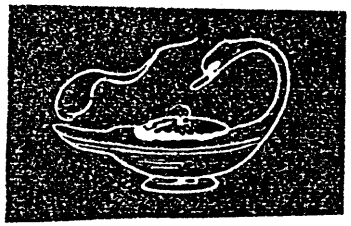
安原米四郎

目次

一　銀行とは何をするところか……一
二　銀行は國家とどんな關係を持っているか……一四
三　銀行の銀行といわれる日本銀行……三三
四　政府の銀行はどんな役割をしているか……五七
五、銀行の金利はどうしてきめられるか……七六
六　銀行はどうやって儲けているか……九八
七　銀行は景氣を動かすことが出來るか……一二〇
八　外國との關係から見た銀行……一三九
九　銀行の統計の見方……一五四
一〇　銀行協會・手形交換所は何をするところか……一六九

安原米四郎

1903年廣島縣に生まる
1926年東大法學部政治科卒業
專門―金融
現在―全國銀行協會連合會
社團法人東京銀行協會
業務部長



銀　行　　岩波新書（青版）178

昭和29年9月20日　第1刷發行　　¥100.

著者　安原米四郎

東京都千代田區神田一ツ橋2—3
發行者　岩波雄二郎

東京都板橋區板橋町10—2484
印刷者　白井知一

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋2—3　株式會社岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　三國社印刷・永井製本

米欧かけあるき

第4次バンキング・チームに同行して

全国銀行協会連合会
事務局長　安原米四郎

まえがき

日本生産性本部の第4次バンキング・チーム（銀行業専門視察団）は1963年（昭和38年）9月20日（金）羽田を出発、途中ハワイで二泊（ここで出発前の疲れをいやすと共に、時差の調整をとる）、同22日（日）最初の訪問地サンフランシスコに着き、翌23日（月）から活動を開始して、以後5週間、10月25日（金）をもつて解散、その後は団員個々に欧州を廻つて帰国した（団員14名のうち3名はアメリカから直接帰国）。

今回は名前の示す通り、4回目のアメリカ視察であり、当初は従来のような詳しい報告書を作ることはやめ、簡単なものにしようという意見もあつたが、出発前に各行の調査担当者で相当詳しい資料が出来上つたので、結局それを基礎に報告書をまとめることとなり、目下整理をして貰つている最中である。

今回の主要な視察項目は、最近におけるアメリカの銀行制度の改革論議の実状、企業と商業銀行との関係、銀行の集中合併の実状、銀行の業務伸展策、商業銀行と他の金融機関との関係等々であつたが、それらの詳細については、何れ近く報告書を公刊するので、ここでは省略することとし、私が今度チームに同行して感じたことを書かせて貰うこととする。

実はこの話を〝金融〟の編集責任者から持ちこまれた時、私は、私よりも団長であつた第一銀行の水津常務に書いて貰つた方が好いのではないかと思つて、水津さんにお願いしたところ、行務多忙のため固辞されたので、やむを得ず私が引受けることとした。またもう一つ私が引受けることにした原因は、私が終戦以来約20年の長きに亘つて銀行協会にご厄介になつているが〝金融〟に執筆したのは、私が調査部に勤務していた数年間の間だけで、その後は一度も書いたことはなかつたので、折角のこの機会にその不義理の一部でも果させて貰おうと思つたからである。

しかし翻つて考えてみると、私はこのようなことを書くには最も不適任な者かも知れない。というのは、性来至つて無精で、出発前に海外に対する予備知識はほとんどなく、旅行中も、無精と言葉の出来ないために、十分の調査が出来なかつたからである。

だがお引受けした以上、私は私なりに感じたことどもを書きつらねてみることとしよう。そうしてこれを皮切りとして、さらに立派なものを他の団員の方々からご発表願えれば幸いである。

1. アメリカの銀行制度について

アメリカの銀行制度がいわゆる二重銀行制度、単一銀行制度といわれる、世界の他の国でみられない、独特なものにその特徴をもつていることは周知の通りである。そうしてその原因が、アメリカ合衆国の歴史的発展と密接な関連を持つものであり、州と合衆国との政治的、社会的伝統と切りはなすことの出来ないものであることも、アメリカに行つて直接見聞することによつて一層認識を深くさせられた。（アメリカの州は今日でも一応それぞれ独立の共和国で、州の憲法を持つている）。

しかし政治も社会もまた経済も、時とともに変貌を続けて行く。かの有名なアメリカ建国以来の外交的大方針であつたモンロー・ドクトリンは第一次大戦によつてある程度の変化を示し、さらに第二次世界大戦後はアメリカが世界資本主義国の

盟主となり、アメリカ軍は世界主要戦略基地に駐屯し、また巨額の対外投資、対外援助を行なつた。

人類の文化は時とともに進み、交通通信機関は飛躍的に発展し、世界はかつてのアメリカ合衆国、いやアメリカの一州よりも小さくなろうとしている。

その間にあつて、アメリカの伝統的な政治、社会のあり方が、何時までもそのままであることは許されない。その結果アメリカの経済のあり方、ひいてはアメリカの銀行制度のあり方も必然的に変貌せざるを得ない運命にあるということができよう。その意味において、アメリカで同国の銀行制度に種々の改革論が出てきているのも歴史的な必然の産物であろう。

しかし一度出来上つた制度はなかなか容易に変るものではない。今度われわれがアメリカを訪問して、その伝統の如何に根強いものであるかをまざまざと見せつけられた。アメリカ銀行制度改革の急先鋒とみられている通貨監督官サクソン氏は、われわれに対して、銀行制度改革の必要性を力説したが、その実現のためには粘り強くPRを続け、人民大衆の支持を得ることが一番大切であると述べた。そのことは一面からいえば、当然のことと思われるが、裏返してみれば、銀行制度の改革もアメリカでは如何に困難なことであるかを彼自身表明しているともいえるのではあるまいか。

しかし現実の必要性は固定化した制度を事実問題として一歩一歩切り崩して行く。つまらない例であるが、その一例をあげると単一銀行制度の州（一つの銀行は一つの店舗しか持てない州）で、一定距離内で通風管か通信管をもつて連絡をつけておけば、二つの建物を一つの建物とみなされていた。

後で述べるように、アメリカでは最近銀行の合併が次々に行なわれている。また支店設置を認めている州では盛んに新支店が増設されている。ことに商業銀行以外の金融機関が急激な発展を示している。さらに目を海外に向ければ、国際的な経済交流は拡大の一途を辿つている。このような現実的な変化は、おそかれ早かれアメリカの銀行制度そのものにも変革をもたらさざるを得ないのではあるまいか。

2. アメリカにおける銀行合併について

わが国の銀行合併の歴史をみると、その代表的なものは、昭和2年の金融恐慌後の合併と、戦時中の政府の勧奨による合併であつた。従つて私はかねてから最近行なわれているアメリカの銀行合併がどのような理由で行なわれているのかを疑問にしており、今度の外遊を機によくその実状を聞きたいと思つていた。幸いわれわれのバンキング・チームでもこの問題を一つの調査項目として取り上げられたので、多くの訪問先で繰返し質問を行なつた。

それによつて知り得た要点を書いてみると

(1) 大衆を取引先にするため

アメリカでは早くから消費者金融が発達していたが、しかし戦前には主として大企業を取引先としていた有力銀行がかなり多かつた。その代表的なものは、ナショナル・シチー、チェース、ケミカル、ハノーヴァ等である。ところが戦後は大衆を取引先にしなければ業容の拡大をはかれなくなり（それは多くの会社が戦争によつて自己資本を充実させ、また設備も過剰になつたこと、また他方大衆の所得が増加したため）、上記のような銀行は競つて大衆を相手としていた銀行を合併するようになつた。

(2) 大口貸出の制限があるため

これは一見(1)と矛盾するようであるが、アメリカの銀行が戦後小口取引に積極的になつたとはいつても、総貸出額のうちに占める比率からみると、大銀行は依然として圧倒的に大企業に多くの貸出を行なつている。ところが企業の方は戦後も引続き大規模化しているのに対し銀行はそれほど大きくならず、しかも一行の債務者に対する貸出総額は法律によつて自己資本の一割までと抑えられている。従つて銀行は大企業の金融を円滑に行なうためにも合併によつて自己資本の急速な増大をはかる必要があつたのである。

(3) 都市の発展に伴い、店舗を増設するため

最近アメリカでも大都市は逐年人口の増加

示しており、とくに大都市郊外は非常な発展を示している。その大衆を取引先にするため新店舗を必要としているが、新しく店舗を作るよりはその地域に前からある銀行を合併した方が物的にも、人的にも有利な場合が多い。

(4) 銀行のコスト高のため

アメリカでも人件費は逐年高くなつてきており、また人の採用も難しくなつてきている。他方事務量の増加に伴つて機械化が進んでいるが、一定規模の機械化を行なうためには相当の資本を必要とする。従つて銀行も一定の規模以上に大きくならなければ採算がとれなくなつてきている。

また機械化だけでなく、銀行の経営全体を合理化して競争力を強化するためにも、銀行の大規模化が必要となつてきている。

以上のようなことが最近におけるアメリカの銀行合併の主な原因と思われる。

3. 商業銀行と他の金融機関との関係

われわれは訪問したいくつかの商業銀行に対して、商業銀行と他の金融機関との関係について質問した。それに対して銀行の人は異口同音に他の金融機関、とくに貯蓄貸付組合 (Savings and Loan Association 略称 S. L. A.)の最近における著しい発展振りについて説明していた。

(それは東部よりも、とくに西部のカリフォルニアでより多く関心が持たれていた。事実サンフランシスコやロスアンゼルスの街を歩いてみると貯蓄貸付組合や相互貯蓄銀行等の店舗が銀行と同様立派な構えをしていたのが目についた)。

参考のためにそれらの金融機関の計数を銀行と比較して示してみると次の通りである。

○金融機関別預金　(金額　単位　億ドル)

	1945年(A)	1961年(B)	B/A
商業銀行	1320	2091	158%
相互貯蓄銀行	154	385	250%
貯蓄貸付組合	74	709	944%

○金融機関別個人貯蓄　(金額　単位　億ドル)

	1945年(A)	1961年(B)	B/A
商業銀行	299	758	253%
相互貯蓄銀行	153	382	249%
貯蓄貸付組合	73	708	970%

それでは何故最近このように商業銀行以外の金融機関の預金が伸びたのであろうか。われわれがアメリカの銀行家から聞いた回答は主として預金利子に差のあることにしぼられていた。(銀行は定期預金利子4%、貯蓄貸付組合4.5%ないし5%。中規模の銀行では0.5%の差なら十分競争できるといつていたし、New York の大銀行では1%までの差なら競争できるといつていた)。

預金利子の外、銀行と他の金融機関について当局のとつている施策の相違点の主なものは

(1)税制面の相違、(2)支払準備、(3)店舗設置について(詳細は省略する)等である。

なおこの外に、戦後商業銀行の主たる取引先である企業が自己資本が充実して、銀行に依存する割合が少くなり、与信面でも銀行と競合するようになつたこと、国民所得が以前より平準化して預金者層が拡大したというような構造的変化ともいうべきものの影響が与つて力があつたこと、さらにひいてはそれら大衆の住宅資金需要が増大したこと等がその大きな原因として挙げられるであろう。

このような傾向に対応して最近アメリカの商業銀行は前項でも述べたように躍起になつて大衆化に努めており、また当局に対しては銀行と他の金融機関と均衡のとれた措置をとるよう要望を続けている。

最近における銀行以外の金融機関の抬頭はアメリカだけの現象ではなく、その後ヨーロッパ各国を回つてみても同じような状態であつた。ロンドンでイギリスの銀行協会を訪ね〝最近における主な問題は何か〟と尋ねたところ、〝銀行と他の金融機関との関係を如何に調整するかということだ〟といつていた。

わが国でも戦後無尽会社が相互銀行となり、信用組合の一部が信用金庫となつて、すばらしい発展を示し、銀行の地位が相対的に低下してきていることも周知の事実である。いわばこれは世界共通の現象であるが、今後これが如何に進展して行くか、金融界に関係しているものにとつては大きな問題の一つであろう。

4. アメリカ雑感

われわれ第4次バンキング・チームは先に述べた通り9月20日（金）日本を立ち、ハワイのホノルルで休養をとり、本土はサンフランシスコを皮切りに、次はロスアンゼルスに飛んで西部アメリカの中心地を視察した。そうして最初に迎えた週末をラスベガスとグランドキャニオンで過し、続いてヒューストン、ニューオリンズに行き、次の週末を南の避寒地マイアミで過した。

第3週目はマイアミから真直ぐに北のシカゴに飛び、続いてデトロイト、ナイヤガラ、ボストンと回り、10月15日（火）アメリカ合衆国の首都ワシントンに着いた。ワシントンからは始めてアメリカの汽車に乗り、最後の訪問地ニューヨークへ直行、ここで一週間滞在してアメリカの視察を終つた。

このようにアメリカの西部、南部、北部、東部とほとんどその全土を回つてみて、まず感ずることは、アメリカに行つた日本人の誰でもが感ずるように、その国土が如何にも広大であるということであり、また同じアメリカの中でも、それぞれの地方に非常に特色があるということであつた。なお今度われわれが行つた時期は秋の紅葉のシーズンで、ナイヤガラを始めとして、ワシントン、ニューヨークの郊外の美しさは日本では見られないものであつた。

それらのことは別として私の今度のアメリカ旅行で感じたことを二、三書きつらねてみると

(1) アメリカ人の態度

アメリカ人の態度といつても、私の接したアメリカ人は訪問先、とくに銀行の幹部の人達で、他のアメリカ人に接する機会はほとんどなかつたが、そういう銀行家の態度でとくに印象が深かつたのは、地位の上下を問わず、文字通り民主的であり、庶民的で、一向にエラ振るところがなかつたという点であつた。それは民間の銀行家ばかりでなく、連邦準備銀行の幹部もまたそうであつた。

それはお客様に対してとくに努めるというものでなく、いわば持つて生れた国民性からきているのではないかと思われるような気分であつた。

(2) 国旗の掲揚

最初の訪問地サンフランシスコ、次いでロスアンゼルスの街を歩いて、とくに目についたのは、主な銀行、会社の玄関に平日でも国旗が掲げられていたことである。（州によつては国旗と州旗と二本立てていたところもあつた）。

私は銀行が何故毎日国旗を掲げているのか質ねはしなかつたが、アメリカにいる日本人の話によつて推測してみると次の三点が考えられる。

一つは、もちろん国旗または国そのものを尊重すること、次は、アメリカ人の多くが、案外アメリカよりも自分（または自分の先祖）の出身国を自分の祖国と考えているので、アメリカに対する認識を強めるための手段。

さらにもう一つは、アメリカでは今日でも州の独立性の意識が強いので、努めて合衆国の存在を強調しようとしていること。以上のどれが当を得ているのか、またこの外に別の意味があるのか私もまだ分らないでいる。

(3) アメリカ経済の特徴

ヨーロッパの先進国に比べれば、遅れて発展したアメリカが、第一次世界大戦から、更に第二次大戦を経て、世界最大の資本主義国となつたが、そのアメリカ経済の特徴は何であろうか。またアメリカが世界最強国になり得た原因は何であろうか。

天然資源に恵まれていたこと、戦争の被害を受けることがほとんどなく、反対に戦争によつて莫大な利益を得たこと、宗教心、開拓精神というような精神面での強さ等、色々考えられるが、私はこの機会に私なりにもう少し掘り下げて研究したいと思つている。アメリカの一人当りの国民所得、平均賃金は世界でもズバ抜けて高い。しかもなお生産力の大きいために少なくとも貿易収支においては今日でも相当額の黒字を出している。

また道路その他の公共投資は日本に比べれば遙かに行き届いており、大規模である。

しかしそのように恵まれているアメリカでも今日では多くの深刻な問題をかかえるようになつている。国際収支の問題、失業者、貧富の格差、黒人問題等々。

そのうち国際収支の問題一つをとつてみても、ある人々は資本収支が問題であるといい、丁度われわれが行つている時は利子平衡税について多くの論議がなされていた。そうしてもう一つの原因とみられる対外援助については、これはやむを得ないものとしてか、あるいは公けに論議すべきものでないとしてか、口を閉して語られなかつた。（しかし政府当局はこの問題についても慎重な検討を続けているらしく、来年度予算にその片鱗を示している）。

この国際収支の問題は、一朝一夕に簡単に解決し得られる問題ではなく、アメリカの経済、政治、社会と密接に結びついた構造的な問題なのではあるまいか。

またアメリカをかけ歩いて感じたことは、アメリカ経済の一つの特徴は自動車中心であり、そうして消費者金融による先食い、先買いの経済であるということである。アメリカがそうなつたことについては、それはそれなりに理由のあることであり、またそれぞれ長所、短所があるであろう。しかしそれと同じことをアメリカと諸条件を異にする他の国々で、そのまま真似をして行くことが果してほんとうに合理的であるかどうか、一考を要する問題ではあるまいか。

5. ヨーロッパ雑感

バンキング・チームは先に述べた通り、10月25日（金）ニューヨークで解散し、私は団長の水津第一銀行常務と一緒に26日（土）夕方同地を立つてロンドンに向つた。ロンドンには27日（日）朝早く着いたが、空港から宿舎サヴォイ・ホテルへ向う途中、ロンドン市街に入ると、ロンドンの街はアメリカ、とくにニューヨークの街より、何となくアト・ホームな感じがした。（これは私の年のせいか、それとも日本人であるためか、どちらとも私には分らなかつた）。

ヨーロッパの旅は、ロンドンから西独のハンブルグ、デュッセルドルフ（ここでケルン、ボンへもドライブした）に行き、それからチューリッヒに飛んで、スペインのマドリッドまで足を伸ばした。そのあとパリに戻り、パリの見物をして、モナコに行き、モナコからローマ、ナポリに飛んで、さらにアテネに回り、それぞれの名所旧蹟をみて回つた。アテネを最後にヨーロッパにおさらばをして帰途につき、途中タイのバンコックとホンコンに各々二泊して11月23日（土）帰国した。

ヨーロッパではとくに用件はなく、主として見聞を広めるために各地を見て回つたのであるが、その間に私の感じたことを二、三書いてみると次の通りである。

(1) 国土の重要性

飛行機の旅で空から国土を見下して回ると、各国の地味の状態がよく分る。広いアメリカでは砂漠あり、山あり、畑地あり、凡ゆる土地が十二分に備わつている。それに対して狭いヨーロッパの国々では、地味が肥沃で、山の少いイギリス、ドイツ、フランスと、山の多いスイス、イタリー、地味の悪いスペイン、ギリシャ、これだけでそれぞれの国の文化の程度、富の程度にかなりのハンディキャップがつくであろうことが推察できる。

人間の文化は昔て、川と海を中心に発展し、主たる交通機関は船であつた。そうしていわゆる第一次産業の製品の不足部分は後進国から非常に安い価格で買いとり、当時の強国はギリシャ、ローマ、スペイン、次いではイギリスのように植民地を支配することによつて富を築き上げた。

しかし今日では最早昔ほど後進国を自分に都合のよい相手とすることはできなくなり、先進国も工業の振興もさることながら、自国内の第一次産業もできるだけ発展させることが極めて必要な要件となつてきている。（もつとも今後さらに自由化が進み、なお進んでヨーロッパ連邦、世界連邦ができるような時代になれば、それぞれの地域に適した分業経営がより合理的になつてくるであろうが）。

その観点からみると、地味の肥沃な国土を持ち、気候に恵まれた国はそれだけ有利になつてくるのではあるまいか。

ヨーロッパではないが、帰途立寄つたタイは、気候こそそれほど恵まれていないが、水が豊富で土地も肥沃のようであつたし、もし今後政局が安定して、善政が布かれるならば、相当発展して行くのではないかと思われた。

私は数年前国内で北海道に旅行した時、北海道の発展のためには第二次産業の振興とともに、あるいはむしろそれに先行して第一次産業をより発展させることが必要なことではないかと痛感した。（またそのことによつて第二次産業も発展してくるであろう）。

(2) ヨーロッパ諸国の封建制

日本はヨーロッパの先進国に比べると、遅れて資本主義革命を行ない、色々な面で封建的なところが多いと一般的にいわれている。しかし少くとも身分制度というか、階級制というか、そういう面ではヨーロッパの先進国の方が遙かに封建的というか、固定的であるということは周知の事実である。例えばイギリスではオックスフォード、ケンブリッジのような有名な大学には一定の身分以上の者でないとなかなか入り難い。また銀行、会社では幹部職員と普通の行員、社員ははつきり分れており、いくら優秀な平行員でもほとんど幹部になれない。しかも平行員の多くは一生平行員であることに甘んじている。いわんや銀行、会社の経営者、大臣等の最高の地位につく人はいうまでもなく最初から家柄ではつきり区分されている。

このようなやり方には、それだけの理由があり、プラスの面もあるであろうが、しかし長い間にはマイナスの面も出てくる。

イギリスではあの有名なプロヒューモ事件のように身分の違つた男女関係で問題が起つている。これは固定化した階級制によつて起る、単なる部分的、例外的事件に過ぎないのか、それともいつかは修正され、崩されて行く歴史的変化への前触れなのか。

私は最近東洋経済新報（昭和39年2月1日号）に紹介されたイギリスの教育制度改革の委員会の報告書（ロビンス報告）の要綱を読んで、やはりイギリスもいつかは変つて行くのではないかと感じた次第である。

(3) ヨーロッパ人の息の長さ

日本人は非常にせつかちであり、また凡ゆる面で過当競争をしている。それに比べるとヨーロッパ人は非常に落ちついていて息が長い。西独ではアデナウアーが戦後10年以上も首相を勤め、やめる時も1年ほどの予備期間をおいた。ヨーロッパ諸国の中央銀行の総裁には10年位続くのが多い。また企業は自分の専門の仕事に集中し、日本の企業のように目先の利益をおつて無暗に仕事を拡張するようなことはしない。

この違いはどこからきているのであろうか。たどちらが良いのであろうか。

日本人がせつかちなのは、人口が多くて、国が貧しかつたからだという人がある。しかし日本より人口の密度の多い国は他にもあり、いわんや日本より貧しい国は他にも多い。勿論それらも一つの原因には違いあるまいが、その上に明治以来の急激な身分制、階級制の崩壊、教育制度のあり方等もその原因になつているのではあるまいか。しかし日本人のせつかちさ、勤勉さ、積極性は一面では長所であり、最近における世界の驚異の的となつた経済成長もそのために実現できたといえるのではあるまいか。

しかし話つて考えてみると、いつまでもこのままで良いかどうか、もうこの辺でじつくり反省して、もう少し地についた息の長い考え方をするように習慣ずけることも必要なのではあるまいか。

(4) ヨーロッパの農業問題

ロンドンである日本の銀行の支店長曰く、日本でも農村問題は大きな政治問題、社会問題であるが、日本の農産物より、より国際的商品を作つているヨーロッパの農村問題は今後より深刻な問題となるものと思つていること。

彼のいうところによると、ヨーロッパ、とくに英、仏、独のような先進国では、農業人口は相対的には日本より少いが、しかし日本と同様有力な保守政党の地盤であり、保守政党はできる限り農等の利益を擁護せざるを得ない。しかるに経済が発展するにつれて、重化学工業は飛躍的な発展を示し、工業労働者の賃銀は上昇する。それに対応して農民も所得の増大を要求するから、政府はそれに応じた対策をとらざるを得なくなる。他方自由化の要求もあるので、問題は一層複雑となり深刻となる。EEC内部でも農産物の自由化が一番問題となつていることも周知の事実である。

第二次大戦後の経済復興は終り、今や世界の主要先進国では生産過剰問題が当面の問題となつてきており、他方農業問題はここ数年の社会主義国

(主としてソビエト、中国)の不作で問題が表面化していないが、今後この農業問題を如何に処理して行くか、確かに大きな問題となつてくるであろう。

あとがき

一般によくいわれるように、多くの旅行者の感想はその大部分が間違つているかも知れない。しかし10のうち一つか二つはその社会で惰性的に生活している人の気づかない点を指摘することがある。私のつたない感想文も、何か一つでも読者にご参考になることがあれば望外の幸いである。また間違つている点があれば御教示を賜れば幸いである。

終りに私に今度の外遊の機を与えて下さつた方々、ならびに各地で歓待して下さつた方々にこの誌上を借りて厚くお礼を申し上げてペンをおくこととする。(1964年2月9日記)

編集後記　　平成３年４月２１日

安原米四郎先生を偲ぶ会を開くに際し、皆様の思い出を

文集風に綴ってみました。

寡黙の人、気骨の人、理想の人、仙人のような人．．．．

表現は違っても、私達にとって欠け替えのない人でした。

今にも、先生がやってらっしゃる気がしてなりません。